ПУШКИН

СКАЗКА О РЫБАКЕ И РЫБКЕ

С РИСУНКАМИ ВЛ. КОНАШЕВИЧА

ИЗД-ВО
З. И. ГРЖЕБИНА

1922

A.C.プーシキン

漁師と魚の物語

イラスト

ヴラディーミル・カナシェーヴィチ

Z.I. グレゼビン出版社

ペテルブルグ
ベルリン

1922

青い海のそばに、老人と老女が住んでいた。
二人はみすぼらしい掘っ立て小屋に住んでいた。

老人は地引き網で漁をし、老女は糸を紡いだ。

ある時、老人が網を海に投げ入れて引き上げると、
網は泥だけになってもどってきた。

もう一度彼が網を投げると、
草が入っていた。

三度目に網を投げたら、
一匹の魚が入っていた。

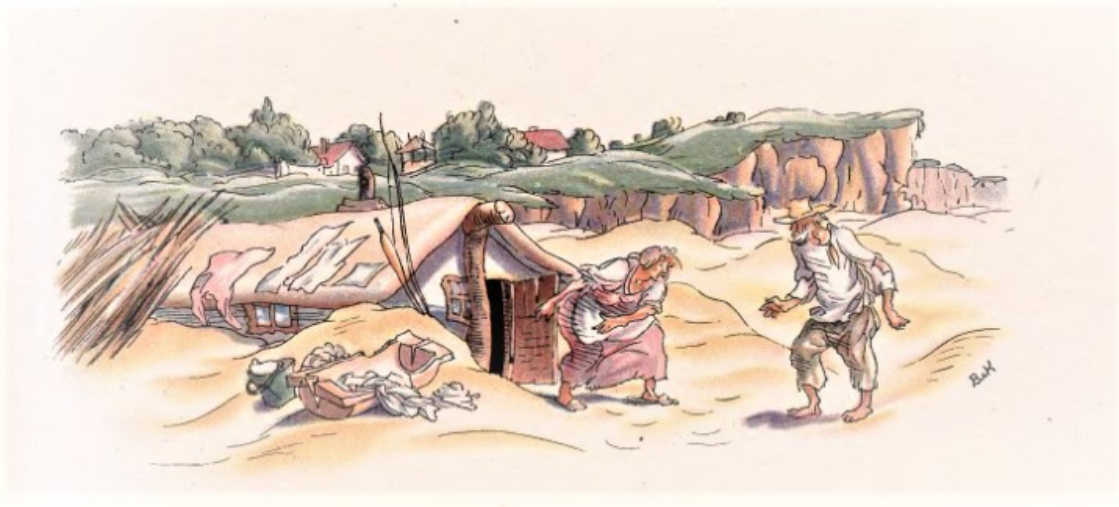
網は一匹の魚を連れて来た、
一匹の魚、黄金の魚を。

黄金の魚はなんと鳴くのだろう!
魚は人間の声でこう言うのだ。

「私を海に帰してください。
　お金はいくらでも出すわ。
　あなたが望むものは何でも払います。」

老人は驚き、怯えた。
彼は33年も漁をしているが、
魚が話すのを聞いたことはなかった。

彼は黄金の魚を放すと優しい言葉をかけました。
「黄金の魚よ、神と共にあれ。
　あなたのお金はいらない。
　青い海へゆけ、広い海をゆけ。」



老人は老女のもとに戻って、この奇跡を告げた。

「今日は黄金の魚が釣れた。
普通の魚じゃない。
その魚は我々の言葉で話した 。
魚は青い海へ帰りたいと言った。
大金を払うとも。
けど、あえて彼女からお金は取らないで
青い海に逃がしあげた。」

老女は老人を叱った。

「愚か者め、この大馬鹿者め!
魚からお金も取れないのか!?
せめて桶でも取ってやればよかったのに。
うちのは桶は全部割れているんだ。」

そこで彼は、青い海へ戻った。海は少し荒れていたが、魚を呼んだ。魚は彼のところに来て尋ねた。

「ご老人よ、何かお望みですか?」

老人はお辞儀をして、頭を下げて言った。

「黄金の魚よ、私を憐れんでください、私は老女を怒らせました、彼女は私を安らかに眠らせてくれません。新しい桶が必要です。うちの桶は全部割れてるんだ。」

魚が答える。

「心配しないで、神様のところに行けば、新しい桶がもらえますよ。」

老人は老女のもとに戻りました。老女は新しい桶を手に入れた。しかし、老女はさらに叱りつける。

「お前は馬鹿だ、物乞い、ばか、桶?
桶で満足か!　愚か者め、魚のところへ戻れ。
彼女に頭を下げ、小屋をもらえ。」

そこで彼は青い海へ行った。
（青い海は曇っている）
彼は黄金の魚を呼び、魚はやってきて尋ねた。

「何がお望みですか、ご老人?」

老人はお辞儀をして言った。

「ご慈悲を、お魚様! 老女老女はさらに激怒し、安らぎを与えようとはしない。不機嫌な女は家をよこせと言っています。」

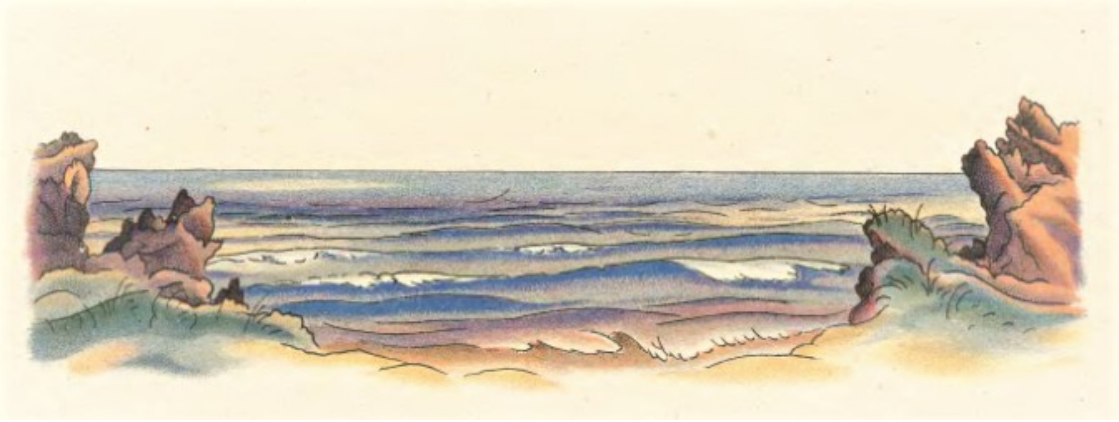
黄金の魚は答えた。

「心配しないで、神様に一緒に行きましょう、小屋がもらえますよ」。

彼は掘っ立て小屋に戻ったが、小屋は無かった。

目の前にあるのは煙突付きの小屋。
レンガと白塗りの煙突がある。
樫の木で作られた門がある。
老女は窓の下に座っている。
渾身の力で夫を叱りつける。

「お前は馬鹿だ、単純で馬鹿だ！　この家のために物乞いをしたのか、この愚か者め！
戻って、魚に頭を下げろ。
私は汚れた農民にはなりたくない。
貴族の女になりたいの。」



老人は青い海へ行った。
(青い海は穏やかではない)
彼は黄金の魚を呼び、魚はやってきて尋ねた。

「何がお望みですか、ご老人?」

老人はお辞儀をして答えた。

「黄金の魚よ、憐れみたまえ。老女はいつになく怒り　狂って、安らぎを与えようとはしない。農民になる　のは嫌だ、貴族の女になりたがっている。」

魚は答えました。

「心配しないで、神様について行けばいい。」

老人は老女のもとへ戻る。老人は何を見たか?
高い屋敷。ポーチには老女が立っている。

高価なセーブルのコートを着て、頭には錦の袈裟をかけ、首には真珠、手には金の指輪、足には赤いブーツを履いている。

彼女の前には勤勉な召使いがいる。
彼女は彼らを打ち、引きずっている。
老人は老女に言う。

「こんにちは、私の貴婦人! あなたの魂は今幸せですね。」

老女は怒鳴った。
彼女は彼を家畜小屋に送り、仕事させた。

一週間、二週間経つと、老女はさらに腹を立てた。

老人を再び黄金の魚のところに行かせようと。

「戻って、魚に頭を下げろ。私は貴族になりたくないの。自由な女王になりたい。」

老人は怖くなって、懇願した。

「お前はどうした、老女、毒でも食べたのか?
足も動かないし、声も出せない。
このままでは国中が笑ってしまうよ。」

老女は激怒し、夫の頬を平手打ちした。

「よくもまあ、反論してくれたな、この国の貴族である私に? 海へ行けと言ってるんだ。名誉あることだろ。行かなければ、連行させる。」

老人は海へ行った。
(青い海が黒くなった)
そして黄金の魚を呼び、魚はやってきて尋ねた。

「何が望みだ、ご老人?」

老人はお辞儀をして答えた。

「黄金の魚よ、ご慈悲を、婆さんがまた反抗している。貴族の女になるのは嫌だ。自由な女王になりたいのだそうだ。」

黄金の魚が答える。

「悲しまないで、神様と一緒に行こう!
　よかった！老女は女王になるんだ！」

老人は老女のもとに戻ってきた。さて、王の部屋は彼の前にあります。部屋で彼は老女を見た。彼女は皇后としてテーブルにつく。大地主や貴族が彼女に仕えている。外国のワインを注いでくれる。焼きたての焼き菓子を食べている。

彼女の周りには、手強いガードマンが立っている。肩には斧が。その姿を見て、老人は怯えた。

老女の足元でお辞儀をした。彼は言った。

「こんにちは、恐ろしい女王様。さて、これであなたの小さな魂は幸福ですね。」

老女は彼を見向きもしなかった。

彼女はただ、彼を自分の目の前から追い出すように命じただけだ。大地主や貴族たちが駆けつけてきた。彼らは老人をドアから押し出した。そして、戸口では衛兵が駆け寄った。斧で切りつけられそうになった。そして、人々は彼を笑った。

「お前のせいだ!」「無知な爺さん!」

「これからは、無知なあなたに教えてあげよう。
間違ったソリに乗らないように!」

一週間が経ち、また一週間が経ち、老女はさらにヒステリックになってる。彼女は役人に夫を迎えに行かせる。彼らは老人を見つけ、彼女のもとに連れてきた。老女は老人に言う。

「魚に頭を下げて来い。自由な女王様にはもうなりたくない。海の主人になりたい。海で暮らしたい。魚は私に仕えなさい。私の言いなりになりなさい。」

老人はあえて口出しはしなかった。
あえて口には出さなかった。

彼は青い海へ。
彼は、海に黒い嵐が起こっているのを見た。
そうして怒濤のように膨れ上がっていく。

彼ら歩き、大声て黄金の魚を呼び出した。
魚は彼のところにやってきて尋ねた。

「何の用だ、ジジイ?」

老人は頭を下げて言った。

「ご慈悲を黄金の魚よ。あの忌まわしい女をどうしましょう? 彼女はもう女王になることを望んでいない。彼女は海の主人になりたいと思っている。海で暮らすために、あなたが召使になることを望んでいる。言いなりに。」

黄金の魚は何も言わなかった。

黄金の魚は水面で尻尾を振るだけ。
そして、深い海の中に戻っていった。

彼は海辺で長い間、その答えを待っていた。

答えはなく、老人は老女のところへ戻っていった。

再び目の前に掘っ立て小屋が見えた。

老女が座っている。

そして、目の前には壊れた桶が。

原文は『アレクサンドル・プーシキン詩集』に収録されたもの基づき、文学評論家のニコライ・オシポビッチ・ラーナー(Nikolai Osipovich Lerner)氏が修正を加えたものを使用しています。イラストはヴラディーミル・カナシェーヴィチが1922年版の絵本のために書かれたものを使用しています。

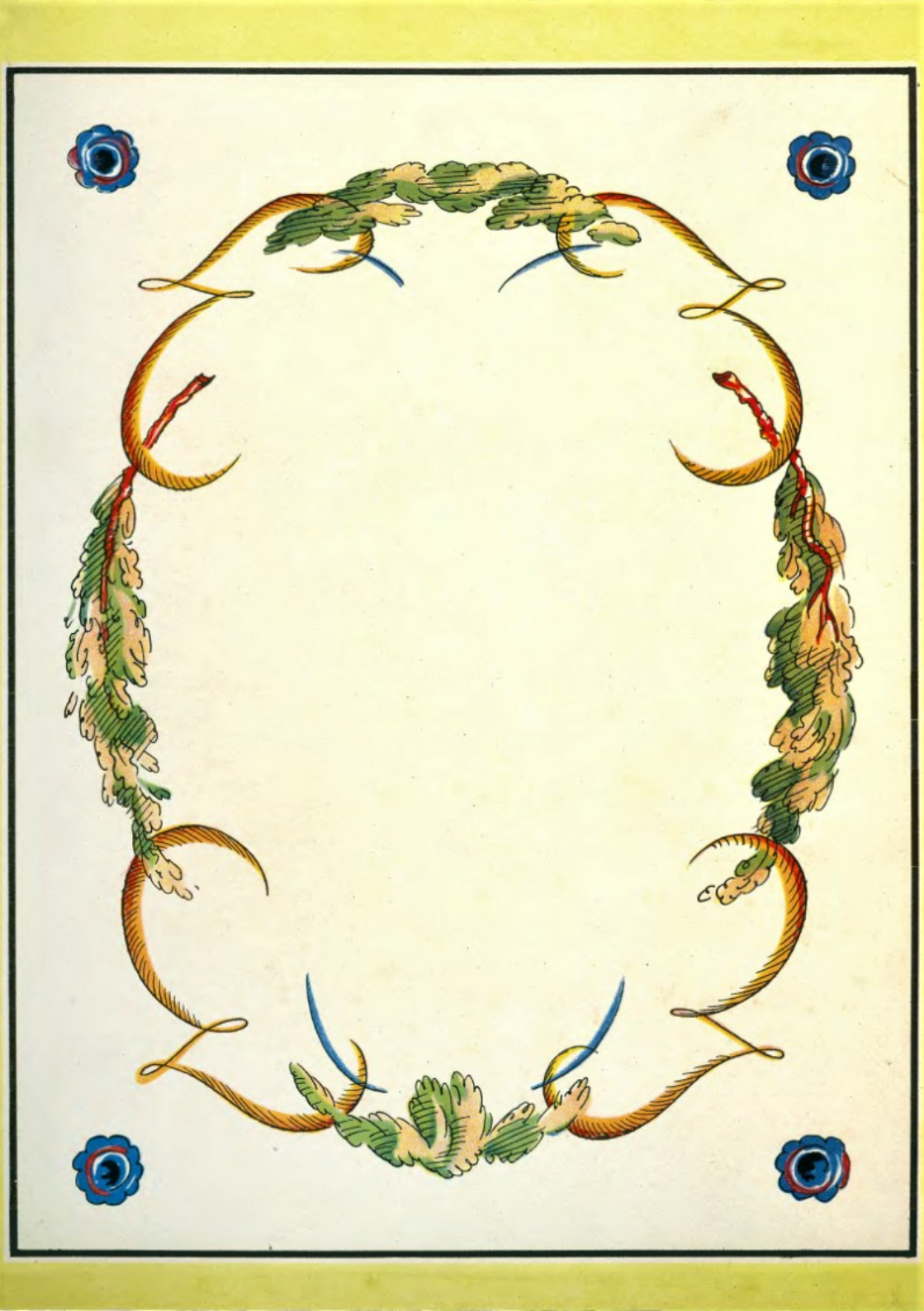
表紙に1922年ベルリンとあるのは、この本がロシア亡命者によってベルリンで設立されたグレゼビン出版社によって出版されたためです。当時、革命によって、ロシア自国での印刷は困難となり、亡命者たちが海外で印刷したものを輸入してロシアで販売するのが一般的でした。

【翻訳】
山口 諒(やまぐち りょう)
国際基督教大学高等学校卒、スポーツ用品(アーチェリー)の評価、輸入が本業。趣味で著作権が切れた古い本の翻訳を行ってます。

・**The Theory and Practice of Archery New Edition(1887)**

・**How to Mix Drinks; or, The Bon Vivant's Companion (1862)**

・**Сказка о рыбаке и рыбке(1922)**

他、アーチェリーの専門書(商業出版)を5冊翻訳・監修。

タイトル：　漁師と魚の物語
発行日　：　2022年7月15日
発行元　：　(株)JPアーチェリー
　　神奈川県川崎市川崎区宮前町12-5-3F
著者　　：　A.C.プーシキン
翻訳　　：　山口　諒
連絡先　：　Twitter / @RYO_JPY